
本当の魔法使いの意味

雨幻

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

本当の魔法使いの意味

【Nコード】

N0165W

【作者名】

雨幻

【あらすじ】

19歳の吉田 怜子は魔法使いを夢見ていた。

そんな時、友人の海神 静江が口を滑らせた言葉から――。

#0 『鳥籠』

——その麗しき魔女は言った。

「いらっしやい。お客さん」

吉田 怜子れいこは、極めて平凡を求めている人物だった。

19歳の娘が、魔法など非現実的な事を夢見ていたら、大概の人は笑うだろう。

そうでなければきつとそれを同じくして求める者か、または、それを理解する者だった。

——そんな時、一人のカウンセラーは言っていた。

『魔女』は居ます。でもきつと貴女の求めるような力では無いでしょうけれど。

カウンセラーの名前は、海神わたつみ 静江しずえだった。

彼女はいつも吉田 怜子の事を気に掛けていてくれた、幼馴染だった。

小学校の頃から高校の頃までずっと馴染みである二人は、お互いによく知っていたつもりだった。

怜子は知らなかった。

静江が、魔女の知り合いである事を。

静江が、その魔女に助けられた事を。

「……もしもし、『鳥籠』ですか？」

怜子が静江から『鳥籠』の事を聞き出す事には、中々に時間がかかった。

静江は存在を示唆はしてくるものの、詳細は言わず、怜子も自分で調べる事もした。

しかしその存在は見つかる事は無かった。

怜子は静江に懇願した。

教えてくれなければ、死んでやると。

そして静江は、怜子を助ける為に秘密を漏らした――。

「そう。『鳥籠』。カウンセリングを御所望で？」

電話の声は、静かで、しかし強かなる声だった。

不思議と怜子は脱力した。

怜子は少し、緊張していた。

それが、ふ、と抜けた様だった。

「はい」

怜子は、まるで本心を語った気分だった。

我を取り戻した様に、怜子は再び構える。

「何時頃を御所望で？」

無駄だった。

再び気が抜けた返事が出てしまった。

『今日の午後2時30分に――』。

「わかった。待ってる」

電話の声はそう言って、ブツンと切った。

怜子は推測した。

私は、『魔法』を掛けられたのだ、と。

——そして今——。

——その麗しき魔女は言った。

「いらっしゃい。お客さん」

怜子は違和感があった。

その部屋は統一されていたし、雰囲気も問題無い。

部屋に腐臭が漂っている訳ではない。

寧ろラベンダーの香りが心地よく怜子を包んでいた。

「君は勘がいい様子だけれど、私が何を仕組んだのかという事が理解できてない様子だね」

その魔女は、まるで怜子を知っているかの様に話し掛ける。

怜子の言葉が出ない事を確認すると、魔女は両腕を大きく広げて言った。

「ようこそ。私の結界へ」

——途端、怜子の世界が揺らいだ。

ぐらり、どころではない。

世界が見失われるかの様に、あまりにも大きな何かを相手にしたかの様に——。

——『魔法』。

怜子の脳裏にこの言葉が遮る。

彼女の感性は、この壮大なる『魔法』の力を感受した。

「成る程、才能は十分、とでも言うべきかな。さて、君の御用はカウンスリングか、それとも……『魔法』を理解したい？」

魔女の鋭い眼光に、怜子は即座に立ち退いた。不敵の笑みを浮かべた魔女は、笑って言った。

「――『魔法』は、君も使っていた。今も使える」

「そんな――私は使えません！」

怜子は、穏やかな眼差しで怜子に言った。

「私は、一つ目に君に『暗示』を掛けた。――以前、静江ちゃんと話したでしょう。その時に『魔法』はほんに些細な出来事から君の力を抜く様にする事もできる……と」

怜子は思い出した。

二度目の会話の時に、魔法の存在を示唆した時の事だった。

つまり怜子は、静江によってあの脱力する暗示が完成していた。

「でも、この結界は――結界の事は静江から聞いてません！」

「うん。これは私の仕掛けだからね。香水にちよつと仕掛けがしてあるんだ。ラベンダーの香りは落ち着かせるから、後はそれに判らない様に仕掛けをしておけばいいんだ」

そう言って、魔女は一つの瓶を手を取った。

「つまり、君はそれを理解していなかったから『魔法』だと認識したんだ。心理学の応用に近いかな？」

怜子は、何故この魔女がカウンセリングをしているか、理解した。彼女は言葉の魔法を使って、人々の心にずけずけと入り込み、全てを悟るかの様にして答えを出す事ができるからだろう。

あの海神 静江の心にもきつとそうして答えを出し、魔法崇拜の

暗示を発揮したのだ。

「では、魔法は全て心理学とかに置き換えられるんですか？」

「君が『魔法』と認識した物は全て心理学に拠って作られた偶像だね。本当の魔法はそう使う物じゃないよ」

「と、言う事は、『本当の魔法』があるんですか？」

——嘘だ。嘘に違いない。

怜子は疑り始める。

そう、怜子は『魔法』の種明かしを聞いて思ったのだ。

人は熱しやすく冷めやすい。

これはまさに、今の怜子の状況だった。

魔女はその様子を見て手に取るかの様に、笑った。

彼女は唄を——唄を謡い始めた。

「『万物は宇宙に在り。宇宙の書庫に在るは神足る存在の断片の記憶。其の断片の記憶は素の祖を司りし文筆の言葉。読解する事は叶わぬ言葉故に理解の理は無き。されど恐れるな。言葉解らずとも意味は伝わろう』……ファンタジイとも言えるこの言葉に必然的な意味は無いし、必要も無いかもしれないけれど、その価値は人それぞれ。百人百色。君にとって意味は有るか、無いか。それはきつと君にとつては無いだろうね。私が言いたいのは、これが『本当の魔法』に繋がるキィ・ワードになっているって事だよ。私の言う『本当の魔法』は、君が今嘘だと思った言葉の中にある。私は、その言葉の力を信じてる。君は、どう思ってる？」

「とりあえず、話が、長いです」

「ご尤も」

——悠々とした様子で魔女はダージリンを淹れる。

カップに程よく注がれたその飲み物は、綺麗な湖面の様に覗き込

む怜子を映していた。

「毒は入ってないよ」

そう言って魔女は、自分の分の紅茶を飲み干した。

怜子は思った。

紅茶は一口で飲み干す物では無く、香りを楽しみ、味わう物だ、と。

しかし怜子は言わなかった。

魔女は自分で言っていた。

『その価値は人それぞれ。百人百色』……と。

故に、怜子は言わなかった。

きつとそういう物だから。

「質問は？」

「『宇宙の書庫』とか、『神足る存在の断片』とかよくわからないんですが、どういう意味ですか？」

魔女は不意を突かれた様に、きょとん、としていた。

率直すぎただろうか——怜子がそう思っていると、魔女は言った。

「信じてないと思っていただけだね」

「信じてませんよ。でももしかしたら信じるに値する物かもしれないと思ったんです」

怜子はそう言って、紅茶に口を付ける。

「『宇宙の書庫』は、多分アカシックレコードと呼ばれてる『世界の書庫』と同様の物かな。『宇宙の書庫』にアクセスできる存在は今二人と一匹らしいけれど、私は全員に会った事は無いから分か

らない。次に『神足る存在の断片』はきつと……そう、言霊と言った所かな。『バベルの塔』の話は？」

いえ——怜子は首を横に振る。

本来——魔女は語り始めた。

「全ての言葉は統一されていたんだ。人はその言葉を喋る事ができた。きつとこれが『神足る存在の断片』。言葉も神様からの贈り物だったらしいよ。……昔、人々は団結したんだ。私は、実は人々だけじゃない。全ての動物が団結して建設された塔の話がある。それが『バベルの塔』。私の持論で話していい？」

怜子は頷いた。

魔女は語るのが少し苦手なのか、または話を上手く繋げるのは苦手だったのかもしれない。

穏やかな顔で、魔女は語り始めた。

「簡略して話すけどいいね。昔、『ノアの方舟』という話があった。神様がエデンの園より追放されたアダムとエヴァより地上に蔓延る様になった人々が、神に対しての侵害を行い、動物を虐殺するという行為があつてね。神を信じる事なく、知恵よりも愚かしい傲慢の行為に身を染めた人々を神々は一度洗濯しようと考えたんだ」

「洗濯……？」

「そう。洗濯」

怜子の疑問にそう言って頷き、魔女は自分のカップに残っていたダージリンを注ぎ、ぐいっと飲み干した。

「その事を一人の神がノアという信心深く、神に都合の良い考えを持つ一人の人間に伝えたんだ。そしてノアとノアの8人の家族は方

舟を作り上げ、その中に全ての動物の祖先を招きいれたらしい。僕は考えた。この時からノア達は動物と言葉が共通だったんじゃないだろうか。ってね。……まあそれで他の人達にもノアは呼びかけたんだけどね。全然聞かなかったんだ。可哀想にね。ノアの家族と動物以外は助からなかった——けれど、そこから更に時が経ち、人々は再び再興した。神々への反抗心を露にしてね」

魔女は寂しそうな笑みを浮かべる。

「そして——神への対抗と復讐の証として、人々と動物は塔を——大洪水すらも届かぬ様に高い塔を建設した」

「それが……『バベルの塔』」

「そう。バベルの塔。でも失敗した」

何故——怜子は疑問をぶつけた。

「神々は——人々と動物の言葉が共通という事が原因だと考えたんだ。案の定そのとおりだった。人々も動物達も言葉がお互い通じなくなった途端、皆バラバラになっていった。団結力なんてそんな物かという話だよ」

「でも、持論でしょう」

「そう。持論。けれど私達はこれを正論として考えている。現に、その言葉は石にも水にも通じる。私が知っている言葉は少ないけどね」

「少ないんですか？」

怜子は、気付けば真っ直ぐに疑問をぶつけていた。うっかりとしていた。すっかり魔女のペースだった。

「全てを知る事はできない。人は神の言葉を知る事が出来ても創造する事は出来ない。所詮は人の領域を超える事は出来ないんだ。例えば『人』が『人の領域』を超えたとしても、それはもう『人』では無くなってしまう。それは『怪物』なんだ」

「つまり——『怪物』なら多くを知る事ができるんですか？」

「つまり……『怪物』なら少なからず語る事も出来る」

——怜子は、ずっと手に持っていたカップを置いた。

「時に」

怜子が言い出した。

魔女は怜子を見据えて何かな？　と言う。

「何時から私に魔法を？」

「君が静江ちゃんと話して魔女の話を聞き出してからだけど」

「本当に？」

「嘘だよ」

「本当は？」

魔女が、にんまりと笑った。

「君が、私と話し出してからだよ」

「電話の、時ですね？」

魔女は、頷いた。

嘘——だった。

怜子は騙されたと思っていた事が騙されていた。

そう、確信した。

「私の名前は、相沢^{あいざわ} 登紀子^{とぎこ}。バイトしてみない？ 怜子ちゃん」

魔女——登紀子はそう言って、怜子に微笑みかけた——。

#1 『愛』

バイトは好きな日、好きな時間。

電話してから来るといい——怜子の中で、登紀子の言葉は何度も、何度も怜子の部屋で呟かれた。

怜子は眠れなかった。

気付けば、夜は終わり朝になった。

カーテン越しに眩い光が寝不足の怜子の眼に痛々しく当たってきた。

「怜子ちゃん、ご飯よ」

怜子は目覚まし時計を手取る。

グモーという珍妙でマイナーなキャラクターの形をした目覚まし時計である。

実は、怜子はあまりこのキャラクターは好きではなかった。

目覚ましの時になる不気味な笑い声が鬱陶しく、すぐに起きて止めていた。

お陰で寝坊こそ無かったが、目覚めは大概悪かった。

今日は——そのグモーの笑い声は聞こえなかった。

時計が壊れていた訳ではない。

ずっと——登紀子の言葉で頭がいっぱいだったのだ。

怜子は部屋を出ると階段を下っていく。

冷たい手すが、怜子の目を覚まさせた。

「おはようございます。伯母さん」

「おはよう。怜子ちゃん」

怜子の伯母——藤堂とうどう 澤さわは怜子に優しく微笑んだ。

「手を洗って……そうね、顔も洗ってらっしゃい。折角の可愛らしいお顔が^{やつ}寢れていて様に見えるわ」

うーん、と考える素振りを見せながら澤はそう言った。

寢れている――？ 怜子はそんな馬鹿な、と考えながら顔を洗って鏡を見る。

寢れた自分等は何処にもいない。

――いない、が。

「寝不足の事かな」

伯母には少々多々の意味を一緒にしたにする癖があった。

例えば疲れていると気分が暗いを一緒にしたいたり。

今回の場合は寝不足で出来た薄い隈と寢れているという事を一緒にしたにしていた。

伯母の一緒にした……というよりこれは最早豪胆とも豪快とも言えるのかもしれない。

その豪快さはこの洗面台にも出ている。

白い洗面台なのだ。

なのに周囲は黒だったり桃色だったりと色とりどりの歯ブラシや歯磨き粉が乱雑に置かれていた。

伯母は片付けが苦手だった。

伯母の妹である怜子の母は生前、大人になっても片付けが苦手な姉を心配してこの家に引き入れた。

料理は上手い。

そしてその美貌はもう三十路であるというのに、物凄く若々しくも感じられる程である。

しかし反面、男に興味は無く、女にも興味は無く。

姉として甲斐甲斐しく妹の世話をしようとした結果、妹に煙たが

られ。

掃除をさせると転び、下手すれば病院送りになり。

洗濯をさせると洗剤の量を間違えたり洗濯機のボタンを押す事を忘れていたりする。

そんな怜子の伯母だが――、

食後に、澤はこんな事を言った。

「怜子ちゃん、昨日はよく眠れなかったみたいだけれども大丈夫？」

生前の怜子の父母と同じ位……愛情に差違等無いのだが、そう言っても過言では無い程に怜子を愛していた。

怜子は澤が好きなのだ。

母親代わりになってくれる澤が好きなのだ。

ただ、グモーのマニアという事を抜けば、好きではある。

「はい……少し緊張して眠れなくて」

「ああ、昨日言ってたバイトね？ 珍しいわよねえ。来る時間帯とかは自由。電話してから来てくれたらいいからって話。私は怪しく思えて絶対申し込まないけれど、やっぱり怜子ちゃんは佳代の娘ね」

佳代は、怜子の母である。

怜子の母は若くして怜子を生んだ。

今の怜子と同じ歳にして母になり、父は大喜びしたそうだ。

しかし母方の怜子の祖母と、父方の怜子の祖母はまるで火山が噴火する様に怒ったらしい。

もうその勢いは水気で潤っていた路地がかんかん照りでアスファルトにヒビが入る程の様だったと怜子は澤に聞かされた。

母は強し――二人の怜子の祖母は怜子の父母を責めたが、怜子の母は『ふざけるな！ 私達にだって愛を育む時間は十分あったんだ！』と男口調で勇ましく啖呵を切ったらしい。

澤はこう思ったとも怜子に言った。

『流石私の妹——凄いなあ』と思ったと。

澤にとって、佳代は自慢の妹だったらしい。

そしてその話を聞いた怜子にとっても、母は自慢の母だった。

一方の怜子の父は勇ましくなんて事も無く、何に対しても仕事、仕事、仕事だったらしい。

澤は怜子の父の仕事は世界を繋ぐ仕事だと言っていたが、全く意味が理解できなかった。

しかし去年——意味がやっと理解できた。

なんと、登録されてる言語を話すと余程訛りが酷く無い限り指定の言語に置き換えられるという世界的な発明がテレビで報道されていた。

その時、怜子の父の名前があげられたのだ。

『この機器の原案は吉田^{よしだ} 和則^{かずのり}さんが提案し、吉田 和則さんを

含め16人の研究者達が作り上げた物でした』と。

父の生死の詳細までは無かったが、澤は笑っていた。

しかし今の怜子はそれよりも凄い物があると知っている。

神が創造した言葉……それが理解できれば、そんな機器すらも遙かに凌駕できるのだ。

「如何わしいバイトじゃないです。その、カウンセリングのアルバイトなんです。ほら、私の親友の静江が紹介してくれたんです。カウンセリングは案外不定期だから、助手を雇う時もある程度時間合わせなんて事はできないそうなんです。それで、私が来る時間帯を言って、その間にカウンセリングがあった場合、私が助手を務める……みたいなそんな感じなんです」

嘘八百では無かった。

確かにカウンセリングのアルバイトではある。

紹介も怜子の親友の静江だった。

ただ——魔法なんて今現在の世界では如何わしい物ではあるかも。
怜子は少し、笑った。

「そっかー……サスペの香り！　と思ったのにねえ」

「勝手に娘を火曜サスペンス劇場に巻き込まないでください」

「怜子ちゃんは佳代の娘よ。私は貴女のお友達よ」

「お友達なら巻き込むんですか……」

「あら、当然じゃない。昔は演劇部で火曜サスペンスの様なサスペンスな劇をしてやろうと皆で頑張っていたものよ？」

少し、怜子はため息を吐きたくなった。

「それで、どんなサスペンスだったんですか？」

「女性関係の縛れで男性が殺人を始める話よ。最初の事件は本妻で、次の事件が愛人。最後が娘を狙うんだけど捜査一課で窓際の刑事さんがその娘さんを助けるの。そして——娘とその刑事さんのラブストーリーが——」

「ちょっと待ってください。それもうサスペンスから脱線してません？」

「あら、冗談よ。そんな路線もあったけど最終的に却下されたわ」

そりゃあそうでしょうよ……怜子は澤に振り回される演劇部員の図が浮かび上がってきた。

「それで、刑事さんにその子が実は自分がその父親に暴力を振られていて強姦されていた事を明かしたの」

「間違いなく学園祭なんかじゃしてはならない話ですね」

「それはそう。学園祭なんかではいけない話だものねえ」

怜子は少し、興味が沸いてきた。

それで？ とやや乗り気に澤に訊いた。

「その窓際の刑事さん、その子に尋問する刑事さん達に怒ってね。こう言うの。『その子は傷付いているのに君達はそれでも尋問するのか！？ 確かにその子の父親は捕まえないといけないが、その子に付いた心の傷を癒す方が優先じゃないのか！』 ってね」

「よく警察やっていましたね。その刑事さん」

「だから窓際になったのよ」

「成る程」

言ってる事に理はある気はしなくてもない。

しかし私なら——私ならきっとその父親を捕まえる方を優先する。怜子はそう思いつつ、話を続けてと言った。

「結局窓際刑事さんはその子の尋問担当になっちゃったの。理由としては一つ目はその子が情を移しているから。二つ目が捜査の邪魔者がそれで動けなくなるからね。その子を慰める時に窓際刑事さんは言ったの。『君の父親は酷い事をした。必ず捕まえて罪を償ってもらうからね』 って。するとその子がどう言うと思う？」

「『宜しくお願いします？』……ですか？」

ノンノンノン……澤はそう言って、人差し指を突き立てて左右に振る。

得意気な顔が、怜子に大外れの予感を与えた。

「それはね、『元々お父さんはこんな酷くなかったから、酷くしないで』 って言ったの」

「凄い娘さんですね」

そう、と言って澤は頷いた。

「凄い娘だったのよ。自分やお母さんが酷い事されたのは、きっとお父さんに耐え難い何かがあったんだ。そんな考え方を持っていたの」

「でも違うんじゃない？」

「正解。よくわかったわね」

「何となく——です」

怜子は少し照れた様に言った。

澤は笑みを浮かべて、話を続けた。

「耐え難い事なんて無かったの」

澤は、コーヒーマーカーを使ってコーヒを搾り出すと、少し飲んで熱くとすぐに口を離した。

そのままコーヒをテーブルに置くと、澤は再び話を始めた。

「答えは簡単。妻に暴力を振らなかったのはその妻が自分の娘に対しての父親の考えを知らなかったから。ちよつと育ってから父親は豹変。娘を女として見始めた。妻は——娘を守る為に反論したんだけれど、父親は怒って暴力を振り始めた。そして外出する日が増えいった。帰ってきたら帰ってきたで、妻を殴り、蹴っていた。娘はそれを聴いていたの。そして暫くしたら、父親が階段を上ってきて娘の部屋に入り、嫌がる娘をぶって無理矢理——」

「思っただんですけど、いいですか？」

澤はええ、いいわよと言って、話の主導権を明け渡した。

怜子は少し考えた素振りを見せて言った。

「その——父親は愛されたかったんですか？」

「その通り。だから愛人も作った。でも所詮愛人も彼が欲しがって
る愛を与える事は出来ず、妻も出来なかった。そして娘も――彼に
怯えた」

「そして――殺人に至ったんですか？」

「そう。殺人に至ったわ。捜査一課の刑事が捕まえるシーンの後に、
窓際刑事が言うの。『アンタの娘さんは、アンタを愛しているよ。』

それなのにアンタは、あの子を傷付けたんだ。この大馬鹿者がっ！
……そしてさっき怜子ちゃんが言った様に、『愛して欲しかったん
だ！ 愛がっ……欲しかったんだよおっ！』と言って泣きじゃくる

の。最後のシーンは『愛を見ていなかったのは、アンタの方だよ』
って窓際刑事が言って、取調室で幕が下りるっていう設定だったの」

「その前に、誰が脚本家だったんですか？」

「相沢 由美ちゃんだったかしら。彼女は文芸部だったけれど、私
と彼女は凄く仲が良かったのよ。この前フランスに行ってからのお
土産が送られてきたわ。ほら、以前怜子ちゃんもお夜食に食べたで
しょう。私のおやつのマカロン」

ああ……、怜子は思い出した。

以前――とは言っても3日前ではあるけれど、静江との電話の時
に相変わらず絶妙にかわされてムシャクシャして食べたあのマカロ
ンの事を澤は言っているのだと理解した。

あの後、澤が本気で怒っていた事はよく覚えているが――次の日
の朝にはケロリとしていて逆に不自然に見えていた事も思い出した。

「あの時は――すいませんでした」

「美味しかったでしょっ！ 本場のマカロンより。さてと、そろそ
ろホームワークの時間だから部屋に引き籠もって来るわ」

「伯母さんは凄いですよね。午前五時から町内ランニング、午前七
時には食事、午前八時からホームワークで午後九時までずっと仕事
ですもん」

これは本音だった。

「実はこれも由美ちゃんにお奨めされたの。『貴女よく気分が塞ぎ込んでるから外に行って空を見上げたり周囲を見る事をしたらいと私は思っているわ。そうしたら塞ぎ込むより自由になれるもの』って言われて、百聞は一見にしかず。やってみたら案外スッキリしちゃって。そこから私、色々と元気になったの。励まされた訳じゃないんだけど、気が付けば立ち直れてたわ」

澤は、思い出を懐かしむ様に遠い目で笑顔を向けていた。
何に對して——かは怜子にはよくわからないが。

しかし、大切な物を見ているのだと怜子は思っていた。

「おっと、こうしちゃられないわ！ お仕事お仕事！」

「あの——、私ももう少ししたらアルバイトしてきます」

「ええ。頑張ってらっしゃい」

澤の言葉に、怜子はいと答えた——。

「と、言う訳で今からアルバイトに」

電話の相手は、こう言った。

「今から約1時間後にカウンセリングのお客様が来る。君も来るといいよ」

そう言って、電話の相手はブツンと切った。

「乱暴ですね……」

——いらっしゃい、魔女はそう言って、怜子を歓迎した。
部屋の雰囲気、昨日来た時とは違っていた。

「今回は子供が相手だからね。少し明るく見える様にしておいたんだ」

「そんな配慮を……」

「うん。『配慮無くして相談受ける無かれ』って事だよ。でも配慮で相手に話しかける事ができないのは駄目なんだけどね」

「どうしてですか？」

「話し掛けれないという視点で見ているからだよ。話しかけないという視点なら遠慮も配慮も無いからそれは別にいいんだけど、話しかけたくても遠慮しがち、相手に対して配慮しすぎて言いたい事が言えないというのは自由さが無いと思わない？」

「仕事で上司とかには配慮はしておくべきだよ——」

「上司には上司の悩みがあるし、うん。君にもある。上司と部下、お互いに相談できる様になったらいいと思わない？」

確かにそれはそうだけど——怜子は言った。

「理想論です」

「格差社会という枠組みの中にいるから理想論になってしまっただ。上司は人じゃなくて宇宙人？ それとも部下が宇宙人？ そんな訳無く、二人は元々人なんだから本来は対等なんだよ。人に格差を付けるのは『人類』の愚かしい術だよ。その人の価値なんてわからないのに格差を何故付けたがるんだろうね」

「それは——」

わからない、怜子が言おうとした矢先、部屋のドアが開かれる。
——小さな男の子だった。

まだ10歳になるかならないかだろう。
幼い風貌の彼はこう言った。

「『鳥籠』ですかあ？」

間の抜けた発声に、怜子は何かがくりときた。
そうだよ——登紀子は少年に微笑んだ。

「カウンセラーさんはどっちですかあ？」

「私がカウンセラー。彼女は助手の怜子ちゃんだ。可愛いからって
惚れちゃ駄目だよ。私の大切な助手なんだ」

それでは何か別の誤解を生みそうですよ。

怜子はそう言いたくなかった。

怜子は、きっと語意は無いのだと思いたい。
そう思った。

「実はあ、相談に乗って欲しいんです」

「立っているのは面倒だろう？ 椅子は用意してあるから、二人と
も腰掛けたらどうだい？」

「あ、はい。ありがとうございます」

怜子は助手席と思われる中間の席に腰掛ける。

少年は登紀子と対極に当たる位置——つまり机を挟んで対極の椅子に腰掛けた。

さて——登紀子はそう言い出して、のんびりと間延びした様子で
言った。

「君の相談は、何かな？」

「お父さんが暴力を——」

喋り方が、変わった――。

登紀子の、魔法。

怜子はそう思った。

催眠術とでも言うべきだろうか。

違う、そうではない。

怜子は気付いた。

少年は、先程と同じ様に真っ直ぐ登紀子を見ていた。

「何故、暴力を振るうんだと思う？ 君の思う事を教えてほしいかな」

「お父さんが、苦しいから」

「何故、苦しいと？」

「お母さんがいなくなつて、お父さんがお酒飲んだ」

「お母さんは何処に？」

「出てったって――」

これは……まるでドラマのシナリオの様じゃないか。

登紀子の思惑は未だ理解できないが、きっと私の予想とは違っている。

怜子の中に、そんな思いが募っていく。

「怜子ちゃん。駄目だよ。君が揺らげば魔法は解ける」

怜子はハッ！ とした。

気付いた。

ここはもう、舞台なのだ。

そして私達が舞台を支え、少年はキャストなのだ。

『魔法』の舞台の上で少年は言った。

「僕は、お父さんに元に戻ってほしい」

「そして、愛して欲しい……だね？」

少年は頷いた。

この話は、何処か似ている。

怜子は朝のサスペンスの話を思い出した。

『愛してほしい』……この言葉が、怜子の中で何度も流転するかの様に巡った。

「君の愛をお父さんに捧げよう。それでもお父さんが愛さないなら、もっと捧げよう」

「それから——お酒は止めさせた方がいいです」

怜子の言葉に、登紀子はいいやと返した。

「こういう場合、お父さんは現実から逃げ出したいんだ。お酒を無くしたらお父さんは現実しか見れない。酷だ」

「でも——」

「私は君におまじないをあげよう」

今度は怜子の言葉を見無視して、登紀子は少年に言った。

おまじない？ 少年は首を傾げた。

「そう、おまじない。本来これは《愛》と呼ばれていた言葉だ。この言葉を——」

登紀子はポケットから白いお守りを取り出した。

「これに宿そう。《愛》は永遠では無いけれど、永遠にも出来る物。君がお父さんに愛を注ぐ限り、お父さんは君を愛する心を持てる様

に」

そう言って、登紀子はそのお守りを少年に渡した。

ありがとう——少年の言葉は、この無機質な部屋によく響いた。

——少年が帰った後、怜子は問いかけた。

「あの愛って言葉なんですが、何か微妙に響きが違っていた気がするんですが」

「あれは共通の言葉だからね。言霊の宿りの具合が違うんだ。一番慣れ親しんでる言葉で聞こえるけれど、重みが違う」

「あれが昨日話した——バベルの塔での？」

「そうだよ」

そういえば……怜子は言葉を続ける。

「私に、魔法をかけたんですね？」

「うん。正確にはこの部屋全体が魔法なんだけれど」

「しかも、魔法の肩代わりをさせましたね？」

「うん。正確には分担なんだけれどね」

「どんな魔法が？」

「聞こえやすくする魔法と、正直にさせる魔法。もっともそう思い込ませるだけのね」

「——え？」

怜子は素っ頓狂な顔をした。

登紀子はクスリと笑って、説明した。

「つまり、全ては君やあの少年の中で進行する魔法だったんだよ。君が君の言う魔法を支えていたのさ」

「私にそんな力は……」

「君の言う『魔法』に気付くのは君の特徴的技能だ。本来は知る由も無かっただろう？」

「そう、ですけど……最初は私の思い込みだと言ってたんじゃ？ てっきり私はずっと掛けていたのかと」

「うん。ずっと掛けてあったよ。君の言う『魔法』の場合は最初は用意したけど継続するのは魔法の対象だったから、私が全て担っていた訳じゃなかったけれどね」

「性質悪いですね」

「元々言霊はそんな物だからね。性質、悪いよ」

そう言って、登紀子は笑った。

釣られて怜子も笑った。

怜子は少し理解した。

楽しい気持ちや苦しい気持ちに変える事もできるのが、『魔法』なんだ。

だからこそ、この『魔法』は——性質が悪いと。

「さて、怜子ちゃん。どうかな。休憩時間としてお茶の時間でも」

「え、あ、はい」

怜子は、柔らかな笑みを浮かべて言った。

「喜んで——」

#2 『生』

昏々と歩く人々に、感銘を受ける事は無い。

闇夜に建つ数多のビル。

数え切れない程のネオンの光。

彼はそんな中、一言二言呟いては、歩き、止まり、再び一言二言呟いては歩き、止まっていた。

浮浪者の中でも彼は飛び抜いて輝いていた。

ネオンの光を受けて、等では無く、その瞳には生への執着が燃え滾っていた。

幸か不幸か。

「《生》に執着して、何が愉快な物か」

黒い革のコートが、男の前からネオンの光を遮った。

巨軀とも言えるその大きな男は、その男を見てニヤニヤと笑っていた。

「如何程に貴様が《生》に執着していようとも、人は不変。やがては死ぬ運命なのだ」

巨軀な男はそう言って、男を嘲笑った。

男はぼろぼろのコートの裾を両の掌でぎゅっと握り、巨軀な男を睨み付けた。

ほう——巨軀な男はより一層、嫌味ったらしく笑って見せた。

「なら貴様に与えてやろう。この《生》の呪いをなあ！」

巨軀な男の高笑いは、人々の耳に澄み渡る様に聞こえる事は無か

った――。

気付けば男はぼろぼろのコートを着た状態で、朝を迎えていた。辺りは夜と違い静かで、眩しかった。

「暑い――」

彼は、自分の声に違和感がある事に気付いた。自分の手を見て、手の皺が無い事に気付いた。近くにあった風俗店のガラスに映った自分の姿を見て、彼は若返った自分を見た。

「何だこれは……」

昨日の事で思い出せるのは昨夜、巨躯な男と会った事。それだけだった。

「俺は……若返った……のか？」

若い肢体は何不自由無く動き、身体が重い事も無かった。何が何だかよく解らなかったが、彼は思った。きっと俺は選ばれたのだ、と。

「そうか……」

笑みが、浮かんだ。

彼は、まず考えたのが、アルバイトだった。しかし――以前の状況も職に就いた事は無かったというのに若くなったからと言ってアルバイトに就けるのか？

「いいよ別に。うちに経歴は関係無い。その場の力のみだからね」

豪胆な女店長——相田^{あいだ} 恵^{めぐみ}は笑って言った。

「という訳で、こいつ新入り！ 名前は外村某だ！」

「外村^{そとむら} 仁^{ひとし}です！ 宜しくお願いします！」

店員達は、あっさり彼——仁を受け入れた。

弁当屋、出張込み、ほぼ店長の自営業より成り立ち今に至る。

給料は少し安い（労働基準法に抵触しない程度だが）が、それに文句を付ける輩はここには来ない。

前歴問わず。

弁当屋『からうみ』は、厳つい奴らが集まっているがそれでも店は何だかんだで人気だった。

「仁い！ この弁当を相沢さんのとこ持っていけ！」

恵の声は、弁当屋の中でも一等響く。

「相沢さん、気難しいからよ。面倒事起こすんじゃないぞ」

丁寧に黒く細長い弁当箱を包んでおかもちに入れた、何処かの極道の幹部の様な風貌の男はそう言って仁の背中を叩いた。

弁当屋『からうみ』には、自動車は無い。

しかし代わりと言っては、自転車は有る。

『からうみ』名義の物が四台、『からうみ』の裏手に置かれているのだ。

相沢、とは『からうみ』の常連客らしい。

ここに来てから三日間、仁は一度も会っていなかったが、どうやら気難しいというのは理解していた。

長い坂を三つ上り、そこからどれ程平らな道を自転車で走った事

か。

走った、というのは語弊があるが。

マンションにしては何か特徴的なマンションだった。

閉鎖的、とでも言うべきか。

何故か仁は、拒まれている様な気がした。

それでも仁は入ると、恵より渡されていた住所のメモに書いてある三階の一号室のインターホンを押した。

「『からうみ』です。ご注文の弁当をお届けに来ました」

「入ってくるといういよ」

そう言われて、仁はとりあえずドアを開けた。

何とも、明るい感じがした。

マンション自体は暗い感じがしたのに、そこは——明るかった。
無機質な部屋だった。

「ぼうっとしてないで早く注文した物を置いていくといい」

黒く長い髪の毛、まるで人形——とまでは行かないが若々しく美しい娘はそう言って、仁の目をじっと視た。

笑ってはいなかった。

寧ろ、さぞかし面白くないといった顔で仁を見ていた。

「な、なにか？」

「可笑しいな、君は若くないのに若い風に思わされてるのかな」
「へ？」

腰掛けるといい、と美しい娘は言う、仁は娘と対極に当たる席に腰掛けた。

その時仁は気付いたが、もう一人居た。

茶毛混じりの肩程までに切られた髪の娘だ。

その娘は美しい、という訳では無かったが、それなりに綺麗な方なのだろうと仁は思った。

「では注文した、ロールケーキを」

「は、はい」

……ロールケーキ？

仁は自分の弁当屋にロールケーキなんてメニューがあったのか、と少し感嘆の意を表した。

確かに、中身は黒く長い弁当箱だった。

「弁当箱……ですか？」

「『からうみ』のロールケーキは美味しいんだ。私の特選だから問題無いよ」

「その前に弁当箱で運ぶ物ですか？　これ」

「怜子ちゃん、外見だけで人を判断する程に愚かしい行為だよ」

黒い髪の娘はそう言って、弁当箱を無造作に取り上げて蓋を開いた。

確かにそこには、ロールケーキがあった。

「それから、その店員さん。名前は？」

「は、はい。外村 仁です」

「不完全な禁忌の形で放置されているから、暫くしたら無理が来ると思うよ」

「はい？」

「つまり、本当に若返った訳じゃないって事なんだけれど」

——なんだ、こいつ。

仁の中から怪訝な感情が沸き上がってくる。

「まあそう敵意を剥き出しにせず、お茶はいるかい？」

「いや、それじゃ俺はこれで」

黒い髪の娘は、嫌な笑みを浮かべた様に見えた――。
仁は逃げるかの様に、部屋を出た。

「あの、若返ったとかって、どういう意味ですか？」

黒い髪の娘――登紀子は、茶毛の髪の娘――怜子の言葉に対して、
淡々と答えた。

「本来、二つの認識をずらさなきゃいけなかった物を内側のみずら
していたという事だ。二つともずらせば禁忌に触れる事になるんだ
けれども……そう、彼は先程言った様に不完全な禁忌で止まってい
る。彼の認識のみがずれているという事だよ」

登紀子はそう言って、六分割されたロールケーキの内一つを手
取り、手早く口の中に押し込めた。

怜子にとって、登紀子が頬袋に満々となる程に大きなロールケ
ーキを頬張っている姿はまるで至福の時を味わっているかの様にも見
えた。

「つまり――彼自身には若返って見えているって事ですか？」

「そう。君には元の老人に見えたらう？ 私には二つの姿に視えて
いたんだ。……何にせよ、危険かな」

「危険……なんですか？」

「そう。危険。彼はいずれ気付くだろう。でも呪いが解ける事は無
いから、精神崩壊を起こしても可笑しくないんだ」

「すごく——危険、ですよね」

そう、凄くね——登紀子の言葉は、まるで静寂を招くかの様に響いた。

「『からうみ』の秋田さんが作るロールケーキはピカイチなんだよ」

そう言って、登紀子はロールケーキの一切れをもう一口に放り入れた。

——仁は、心底気分が悪かった。

何を言っていたんだあの女は……そんな奇妙な疑問符に、薄らと自分の中で答えが視えた気がする。

しかし仁は、気付かないふりをした。

「おう、帰ったか——おい、顔色悪いぞ。何か遭ったのか」

恵が、心配している。

この心配は、自分が若々しい労働力だからなのだろうか——、仁はそう思うと、苦々しい思いが自分の身を支配していくのを感じた。
——嫌だ——。

折角の若々しい姿を手に入れたのに——戻るのか？ 俺は。
凄まじい拒絶の意が、仁の身体を冷たくする。

「大丈夫です」

一言、そう言って仁は厨房に入ってしまった。

——漆黒の闇に身を潜ませるかの様に、巨軀の男はこそこそと動いている。

何とも通報したくなる様な怪しい絵図の中、一人の女が男の前に立ちはだかる。

「お陰で日本に帰国って所だけでも、私はあまり喜ばしくない、かな」

「チッ……《吹け！》」

強い強風——まるで小さな嵐が女目掛けて向かってくる。

「《返せ》」

女の言葉に呼応するかの様に、嵐が踵を返して巨軀な男に向かう。男はそれを回避しようとするが、どうあってもそれが尾行するかの様についてくる。

「《返せ》！」

男の言葉に、嵐は呼応しなかった。

「同様の真の言葉を使って、私に勝てる訳が無い。下手な禁忌の力を纏おうとも、私に勝つにはどうにも力が足りていない。君は私に勝つ気があるのかな」

女が流暢に語ると、嵐が爆ぜるかの様に姿を消す。

消え逝く者に——男の言葉が、絞め殺されるかの様にか細く出る。

「消え逝く者に、勝つ気だと？」

男が、笑みを浮かべる。

女も、笑みを浮かべた。

「消え逝く者に勝つ気等、毛頭無いわっ！」

「《その程度で化け物に成った積もり?》」

男の顔から、笑みが消える。

——恐怖。

女の笑みが、いやらしくなっていく。

——嘲笑。

「貴様……まさか! そんな筈は無いっ! 真の言葉で語る等……
そんな芸当ができる筈が——」

「《可能だよ。尤も、人には無理な行為だ》」

女はそう言って、悠然と男を見下す。

「《例えば、私の右手に剣がある。これで君を斬れば、君はきっと死ぬだろう》」

男は、女の右手に握り締められた剣を見遣る。

——馬鹿な……男の中で、恐怖が積もっていく。

「さっきまでそんな物は無かった……それは幻だな!」

「君が幻と思っても構わない。どの道、君の言う幻が君を斬れば、
実際の君に傷が無くとも、君の心臓は停止するだろう」

女が、一步、近付いた。

男が、一步、後ずさる。

「どうしたのかな。君は、幻と言ったじゃないか。逃げる必要は無い。寧ろ立ち向かうべきでは無いのかな?」

「黙れっ!」

「何を怯えているのかな」

黙れ——男が口を開いた。

声は出ていない。

彼は、既に恐怖に身を喰われていた。

「君は私の精神力に勝てない。だからこの剣に怯えるんだ。君にはどんな姿に見えているかだなんて、私には理解し難い——だが、君には『剣』という形状を知っていた。例え憶測でもその言葉を知っている時点で君は負けていたんだ。尤も、私に勝てる強さを持っていると言うのなら、また話は別なんだがね」

饒舌な迄に語る口を持つ女は、そう言って男の首を左手で締め上げる。

化け物の様な力——そんな力を見せ付けられた気分には男はなる。

「怯えている君を締め上げる事なんか、至極簡単な事だよ」

「貴様……!!」

男は、その左手を取り払うかの様に右腕で女の左腕を打つ。

その手はあっさりと取り払われる。

女は満足気に男を見下して、言った。

「脆弱。実に脆弱だ。それでも君は魔術師？ 脆弱すぎて話にならない」

「貴様——そうか、貴様は『クリムゾン紅血の魔術師』か？」

「そう。私は君の予想した通り、それが私の『ウエッチャー魔法警察』での通り名だ」

「何故貴様は私を追っている」

「友人が君が禁忌である《生》を使ったから、懲らしめてあげてくれって言うててね」

ウオッチウイッチ

「『箱の中の監視者』……アリスが、この私を懲らしめろと言ったのか？」

「アリスは言ってたよ。『まさか彼が、こんな行動に走るだなんて。この世界がこの私の理解を遥かに超える力を持っている事には、私はすごーく驚いているんだけれど』……似てた？」

そう言って、女は男に微笑んだ。

いや——男はそう言って、立ち上がった。

「最初から私を殺す気は無かったのか」

「アリスは懲らしめろとは言ったけど殺せとは言っていないし、私自身は正直アリスの頼みじゃなきゃ何もやらずにフランスで優雅に遊び呆けていたかった」

女が残念そうな顔を見ると、男は素っ頓狂な表情を浮かべた。

つまり——蚊帳の外なのである。

男の存在は、正直女にとってはどうしても良かったのである。

途端、ふつふつと男の中に怒りがこみ上げてくる。

貴様——彼はそう言って、女に殴り掛かった。

女はそれを左手で受け止めると、言った。

「《無意味だよ》」

男は自分の右腕から力が、ふっ、と抜けていくのを感じた。

身体中から、まるで諦め——失意の如くして力が抜けていた。

男は、立っている事すらも儘ならぬ状況にまで陥る。

「まあ、これに懲りたらもうしない事を推奨するけれど」

あ、そうそう——女はそう言って、腑抜けた男の頭を両手で驚掴

みにして起き上がらせる。

「彼が精神崩壊する前に真の言葉の継続を止めないと、私が面倒な事をしなければならなくなる」

「わ、わかった」

女はパツと男を放すと、男はどきりとざらついた冷たい地面に平伏した。

「そうそう、アリスが『もし良ければグモーのお人形、お土産に買って来てね。買って来ない時は悲しいけれどさようならだ』とも言っていたから、是非買う事を推奨しておくよ」

そう言って、女は暗闇に姿を埋めるかの様に消した――。

「おのれ、『クリムゾン紅血の魔術師』――あいざわ相沢 ゆみ由美め……っ」

男の言葉は、空しくも響き渡る事無く、力無く吐き出された――。
――朝である。

燦々と眩しい光が、仁の眼にはもう見慣れた風景に見えた。
彼が起きた場所は、厨房だった。

何かが焼かれている音がして、仁は飛び起きた。

「起きたんだね。おはよう」

そこには、先日ロールケーキを届けに行った時に会った娘――登紀子が居た。

何故此処に――男は、敵意を身の内に隠しつつ、登紀子を凝視する。

「そんなにじつと見ないでくれ。照れるじゃないか」

そう言って、登紀子はフライパンに乗っている卵を宙に浮かせるかの様に打ち上げた。

油が、燦々とした日差しを反射する姿はまさに、輝ける雫の様だった。

——ふう、と登紀子は一息吐くと、汗を自らの腕で拭った。

両面こんがり和小麦色に焼かれた卵焼きを中央の机に適当に置いてあつた弁当箱の器に盛り付けると、彼女はそれを仁に差し出した。

「お腹が空いたろう？」

確かに、空いていた。

仁は、昨日から何も食していなかった。

仕事が終わった後、一気に力が抜ける様に視界が揺らいで、気付けば今に至った事を思い出すと、彼は『からうみ』の店員に申し訳なく感じた。

「昨日はすまなかったね。君がわざわざ混乱する様な言い方をして」

仁が卵焼きを頬張っていると、登紀子はそう言った。

その様子は少し淡々としてはいるが、柔らかな笑顔が、まるでその淡々とした拍子を隠す様に本当の気持ちの様に仁は思わされる。

「実は、君にはある一種の呪いまじなが掛けられているんだ」

「知りませんよそんな事」

「うん。知ってたらもう精神崩壊を起こしているか逃避行動に走っているかのどっちかだと私は思うけれど」

本当——なのか？ 仁の中に、嫌な説得力を増している彼女の言

葉がずんずん突き進んでいく。

「まさか——そんなっ」

「本当に若返る方法なんて無いんだ。君は君でしか無い」

「馬鹿なっ！」

「現に——今、君はそんな皺くちなな手で顔を覆っているじゃないか——」

彼女の言葉に、自分の手を顔から離した。

確かにそれは——皺くちなな、元の自分の手に見えた——。

「馬鹿なっ！ 馬鹿なっ！ そんな筈は無いっ！ 俺は、若返ったんだ！ もう一度、今度は間違えない様に俺は人生を歩むんだっ！」

嘲笑うかの様に、登紀子はクスリと笑った。

何が可笑しい！ 仁の声はより一層大きくなる。

人生は——登紀子の表情から笑顔が決めて、仁を真っ直ぐと視る冷たい表情へとなる。

「そもそも間違いなんて事は無いんだ。君がした行動を君が間違いだったと考えただけで、そこに間違いも何も無い。他人が間違いと言っても所詮は同じ事で、君が間違えた事なんか一つも無い。君は『間違いだった』と思い込みただけなんだ。後悔をしたところで、君が行動した事には変わりはない。つまりその時の君はその行動を選んだんだ。その時、君は間違いだったと思っていたのかい？」

言い返せなかった。

後悔は、後に来るから後悔なのだ。

悔いる事も全ては後にあるから悔いるのだ。

間違いだったと気付くのも、全ては後から気付く物だった。

間違いだと知っている行動を避けようとも、その次の間違いには気付かない。

仁は、既に間違いに気付けなくなっていた。

否、登紀子はそもそも間違いは無いという。

仁は混乱した。

そんな最中、登紀子は言った。

「間違いか間違いではないかは個々の差で決まる。それが多ければそれが『普通』になる。君が間違いだと思っている事が例えどういう事だろうとも、若かりし日の自分を後悔するのは良くない。今の君は、昨日のはきはきとした君は、昔の君が居たからこそ成り立っているんだよ」

「お前は後悔した事は無いのか？」

仁は敵意を露にして登紀子に尋ねる。

「無いかな。今の私は昔の私が居たから成り立っているんだ。例えば人々が私の行動を間違っていると云おうとも、私は私の意見を曲げる気は無いんだ。私は、私の行動には意味がある物だと信じているから。必ず、どんな些細な行動でさえ意味があると、信じているから」

そう言って、登紀子は誇らしげに仁を見遣った。

「——おい、あんた」

「ん？」

登紀子がカウンターを出て店を出ようとスライド式のドアを動かした時、仁は問い掛けた。

「名前は？」

「相沢 登紀子。改めて、君は？」

「外村 仁。登紀子、――俺の姿は、老人か？」

「うん。大丈夫だよ。ここの店長、外見差別とか全く無いから。こ
き使われちゃうよ」

そう言っ、登紀子は笑った。

不思議と、仁の心は晴れていた。

眩しい日差しが、仁の心に燦々と降り注いでいた。

――登紀子が去った後、再び仁は自らを洗面所の鏡で見る。

そこに映っていたのは、確かに、元の老人である外村 仁だった。
されどその目には、生への執着等では無く、ただ燦々と輝く太陽
の如くして輝いた心が持つ光がいつの間にか宿っていた――。
彼は、気付いた。

「『生』って、こういう意味だったんだろうな」

と――。

#3 『勇氣』

「そういえば、母さんがこの街にいるんだ」

カウンセリングの仕事の間を縫って、登紀子は部屋のレイアウトを変更していた。

怜子はそれに呼ばれた——というよりも彼女自身が手間を望んだ故に呼ばれ、それを手伝っていると、登紀子は不意を突く様にそう言った。

「お母さんが——ですか？」
「うん」

怜子は艶やかな桜色の壺を置くと、そうなんですか、と呟いた。思えば、怜子は登紀子の事をよく知らない。

『魔法使い』、『私の求める事を教えてくれる人』、『口調が変な人』。

そんな僅かな情報の渦中にいる登紀子がそう言った事には、怜子は興味を持たざるを得なかった。

「お母さんは、どんな人なんですか」
「『凄い人』かな」

怜子は、登紀子以上の存在は未だ見た事は無かった為、想像が出来なかった。

どう凄いのかはよく知らないとはいえ、あの登紀子が言うのだ、きっと『凄い人』なんだろう。

「私が尊敬する人の一人だよ」

それが、怜子により一層『凄い人』というイメージを与える。
つまりこれは、登紀子が自分以上に『凄い人』という事を怜子に
教えたという事になる。

登紀子以上の存在が、いる——これは怜子にとっても、解らな
った訳では無いし、予想しなかった訳でも無い。
如何様にもその説明は可能だった。

しかし、怜子自身がそれを見た事は無かった。
それを登紀子が言ったのだ。

『私が尊敬する人の一人だよ』と。
これは、怜子も認めざるを得なかった——。

「それは——凄い、人ですね」

怜子の言葉には、一切の嘘の気持ちは無かった。

寧ろ、ある一種の尊敬の念を込めて彼女はそう言った。

『登紀子に尊敬される程に凄い人』……これは彼女にとって、凄
まじく強烈なイメージになった。

彼女よりも凄い人を尊敬する——これは、怜子にとって当然の気
持ちであった。

「——うん、これならいいかな」

艶やかな桜色や、白いカーテン、壁紙も一新して貴族風の部屋へ
と生まれ変わったそこに、うわぁ、と怜子は圧巻の一声をあげる。

「時に、登紀子さん」

「何かな」

「これだけの事をするお客さんが来るんですか？」

「——近々来る予定なんだ。視察にね」

——視察？ 怜子の中に、新たな情報が叩き込まれる。
視察という事は、登紀子はどこかの組織に所属している？
そんな考えは本来怜子にとってはどうしても良かったが、登紀子の
事ともなるとまた別の反応だった。

「登紀子さんは何処かの組織に所属してるんですか？」
「うん、一応アリスのカウンセリング業務担当になってるんだ」
「アリス……？」

以前から、登紀子から人の名前を聞く事は無かった。
今、初めて『アリス』という名前を彼女は知った。
彼女が最初に連想したのは、『不思議の国のアリス』という作品
に出てくる、主人公の少女『アリス』だった。

「もしかして、魔法使い——ですか？」
「うん。『箱の中の監視者』^{ウォッチウィッチ}と呼ばれる魔法使いだよ」
「うおっち……ういっち——ですか」

早口言葉で言えいつかは囁むかもしれないような言葉は、少し
楽しいネーミングと思わせる。

怜子はそんな節を思いつつ、考える。
そもそも上司の関係にあたるそれが何故此処に来るのか——。

「その、アリスさんは上司——ですか？」
「うん。色々な会社を切り盛りしてる凄い人だよ」

また『凄い人』——世界は広しと云うが、まさにこの事なのかも
知れない。

怜子の知る世界は、実はかなり狭いのだ。

そんな事を色々考えていると、登紀子が言い出した。

「そうそう、怜子ちゃん。この前いい茶葉が入ったんだ。どうかな、お茶会だなんて」

「お茶会と言えば『不思議の国のアリス』にも『お誕生日じゃない日』のお茶会もありましたよね」

「ああ、もしかしてアリスの名前を聞いて『不思議の国のアリス』を思い出したのかな？」

「はい」

うーん、と登紀子は唸って、一息吐くと言った。

「私の言ってるアリスは君の言うアリス程可愛気が無いかな。強いて言えば人気低迷化してたグモーのグッズを作り出して満足してるとか、子供じみた可愛い所は無い事も無い」

『グモー』——怜子はすこし引き攣った笑顔の気分だった。

まさかこんな所でグモーの名前を聞くとは思わなかったのだ。

「実は、アリスの前では言えないんだけど——私はグモーがあまり好きじゃないんだ。こう……不気味可愛いとかそういう感覚は無くて——不気味な物是不気味なんだよ」

「ええそうですね。あの不気味な声に朝起こされる気分はあまり好くないですよ」

ん？ と登紀子は首を傾げた。

怜子は自分の笑みが苦笑から更に嘲笑になっているに気付いた。しかし登紀子はそっちを気にしていた訳では無く——もう一つの事に引っかかっていた。

「怜子ちゃん。どうしてグモーの目覚まし時計を持っているんだい？ あれは世界に三つしか生産されてない代物だよ」

「どれだけ希少価値なんですか……私の伯母がグモーマニアで、以前誰からか貰ったらしいんです」

「もしかしたら母さんの友人かも知れないなあ……」

はい？ と怜子は首を傾げる。

何故そこで登紀子の母親が出るのかが怜子には理解できなかった。そもそも登紀子の母親は何をしている人なのか。

次に、『母さんがこの街にいるんだ』という事は——いつもはこの街にはいないのか。

怜子は遠回しな事実を伝えられた気分になりつつも、棚からティーセット一式を取り出して、机の上に置いた。

ティーポットに登紀子は出来上がった紅茶を淹れ、先程一新した白いテーブルに置くと、怜子に言った。

「まあまずは腰掛けるといいかな。ずっと引越しの準備の様な事をして疲れただろう？」

怜子はいつも通り、登紀子の対となる様に腰掛ける。

「きつと君は、母さんについて疑問符を抱いたんじゃないかな。『何故、そこで母親が？』とか——かな？」

そう言って、登紀子はティーカップに紅茶を注ぐ。

「誘導——したんですね？」

怜子の言葉に、登紀子は柔らかに頷いた。

「そう。段々とわかってきたね」

「はい。色々と私に対しての言葉遊びは大概誘導尋問のような形ですから」

「さて、その理由だけど。私の母さんはアリスの友人なんだ。私も同じくね。少し長くなるのと、聞いたら後戻りは出来ないけれど――いいかな？」

そう言って登紀子は紅茶を丸呑みした。

はい、と怜子が言ったのを確認すると、登紀子は語り始める。

「古くはフランスのとある少女が意識不明の状態で、病院ではなく魔法使いの所に送られて来た事が始まりになるんだけど――まあその前に、その時から『魔法警察^{ウオッチャー}』は存在していた。所謂魔法をある程度取り締まる様な組織がね。これもまた自由な組織でね。度が過ぎない限りは問題ない。所属するもしないもある程度は自由。する場合^はは危険に及ぶ可能性への覚悟だけ。色々^とと自由な感じな組織なんだけど――その魔法使いは、その少女が『大いなる力』によってとんでもない事になっている事に気付いて、すぐに『魔法警察^{ウオッチャー}』に保護を求めた。この時からある程度の資産力があつたその組織は、少女を保護した。すると驚く事に、彼女は天然の『宇宙の書庫^{アクセサリ}』への接続権を持つ『接続者』だったんだ。結局意識不明だったのは『宇宙の書庫』の大いなる力に引っ張られて無理矢理引き剥がされたんだけど、彼女は何度も生還していたんだ」

「すいません、古すぎてわかりません」

「うん。そうだろうね。まあその彼女がアリスなんだけど」

「はい？」

怜子は首を再び傾げる。

「天然の接続権を持つ動物達は案外いるんだけど、大抵は大いな

る力に呑み込まれてそのまま死んでしまう。疫病とかそんな風に勘違いされがちだけれど、実際は精神ごと持って行かれてるんだ。それでも生き残った存在は——時の概念の鎖を断たれ、その時の儘身体が固定され、成長しなくなり、精神だけが時を知る事になってしまふんだ。つまり、不老不死の存在になってしまふという事かな」

「ファンタジーですね」

「うん。凄くファンタジイだけれど、これは空腹感等の感覚が時と共に消えてしまい、やがて何も感じなくなる危険性を孕んでいるんだ。アリスやジャーバ、チェシャはそんな中を生き残ってきた存在なんだ。本当に凄いとしか言えない」

ジャーバ、チェシャ——またこれも『不思議の国のアリス』に纏わる名前なのだろう。

怜子はそう思い、当てはめようとする。

チェシャはチェシャ猫だろう。

そこまでは出たが——ジャーバとは一体何なのかが、怜子の中では一つも該当する物は無かった。

「それで——、そんな中、母さんはアリスと会ったんだ。最初は肉の取り合いで出会ったらしいんだけどね」

「壮絶に壮大なイメージから食卓のイメージに変わりましたね」

「うん。焼肉の最後の一枚をめぐって『魔法警察』^{ウオッチャー}が戦場となりかけたんだ」

「レベルが違いますか？」

「そう。レベルが違う」

怜子は紅茶を一口飲むと、ふう、と息を吐く。

登紀子の顔が段々と暗く、苦笑に変化していった。

そんな事にも気付いているのか気付いていないのかも判らない儘、登紀子は話を続けた。

「二人は凄く相対してね。主に食べ物関連で——結果、アリスは危険分子と判断されて独房の様な場所に閉じ込められたんだけど——毎日毎日、母さんは食事を持って行って、二人で取り合いをしてたんだ」

「どこのドラマですか？」

「そこから気付けば一年経って、母さんはアリスに一番近い友人になったんだ」

「珍しく流しましたね」

「私も色々精一杯の説明なんだよ明智君」

「登紀子さん、私は明智警部じゃ無いですよ」

とんちにとんちを重ねるかの様な言葉の交わし合いが続きそうになったその間際、怜子が問い掛けた。

「つまり——グモーの時計は登紀子さんのお母さんがアリスから私の伯母へと橋渡しした代物だと——そういう事ですね？」

「そう。それが君に渡ったんじゃないかな」

「随分と縁のある話ですね」

「凄く必然的な縁だね。アリスならある程度読み切っていたかもしれないけれど」

馬鹿な……怜子の中に、そんな事は無いだろうという思いが過ぎり、その後もう一つの『可能性』が過ぎった。

まさか……怜子の中に、それも在り得るのか？　という考えが過ぎる。

困惑の世界が広まった。

「そ、そんな事が可能なんですか？」

「アリスは世界の概念から外れてるからね。世界の流れを見据える

方法を知っているんだ。お陰でアリスが立ち上げた会社はどの会社も黒字なんだよ」

「つまり、株の価格が高騰する事を前以て知っている社員から情報を受け取りその株を買って社員と儲かりを山分けする様な——何を言ってるんでしょう」

怜子が首を傾げる。

いや——登紀子は腕を組む。

「正直、大体そんな感じになるんだ。未来予知の様な物なんだ」

「よく誰も疑いませんね」

「表側社長は皆別の人になってるからね」

「何処の黒幕ですか？」

「世界中の黒幕に近いかな」

「大魔法使い所か『悪の大魔法使い』じゃないですか！」

うん——登紀子は頷いた。

「これを知ってしまったが最後、口外すれば消されるという噂だよ」

「その場合登紀子さんが消されますし」

「私は大丈夫なんだ。社員だからね」

社員の特権か——怜子がそう思い耽っていると、後方より声がする。

「すみません、『鳥籠』ですか？」

気弱そうな男性の声が響く。

「いらっしゃい」

登紀子がそう言うと、怜子のカップを自分から見て右側に移動させる。

それを見て怜子は察したかのように自分もカップの様に席をずれると、そこに黒い髪の気弱そうな男性が腰掛ける。

何故気弱そうな印象を受けたのかは、恐らく彼の『眼』だろう。

意志薄弱と言うべきなのだろうか、それはおどおどとした様子で移ろい、右往左往とよく動く。

落ち着きが無いのか、それとも本当に意志薄弱なのか。

怜子は気になった。

「あ、あの……以前お会いしました——よね」

怜子はそう言われて、私ですか？ と自らを指差した。

彼は頷く。

怜子が思い出そうとするが、全く憶えが無い為うーん、と唸った。

「あ、いえ、いいんです」

「すみません……」

怜子は申し訳ない気持ちで自分の身の内に染み出てる感覚を感じ取ると、彼に頭を下げる。

そんな中、登紀子は言った。

「静江ちゃんからのおつかいかな」

「いえ、今回はカウンセリングを」

『静江ちゃんからのおつかいかな』——怜子はハッ！ とした。

彼は海神 静江の助手である。

以前、登紀子の事を尋ねる時に、二度、三度会っている。

お茶を出して貰ったのに——怜子は少し、恥ずかしくなった。

「あの、もしかして静江の助手さん——ですよね？」

「は、はい！」

彼は明るく返答する。

やはり、恥ずかしかった。

全く以って彼の存在は思い出せなかったのである。

「それで、何で私の所に来たのかな。カウンセリングなら静江ちゃんに頼めばいいと思うんだけど」

「その——先生の悩みを解決してくれたといつもお聞きしていたので、きつと僕の悩みも解決してくれると思いますよ」

「内容に依_よるね。それに最終的には君が何とかするしかないんだから、そんな気弱でどうするのか」

そう言って、登紀子はカップに茶を注ぐ。

君もいる？ と登紀子が言うと、彼は丁重に断った。

静江の所にいただけあって、返答だけはハッキリしていた。

「僕は、静江先生の事が好きなんです」

「告白したらいいんじゃないかな」

「もしフラれたらどうしたらいいんですか！」

登紀子は間髪入れずに応答した。

「私なら尊敬の念で留めるかな。仕事場に恋人が居るのは私にはあまり解らないけれどいい気分では無いと思わないのかな。遠慮してしまうだろう？」

「じゃあこの気持ちを捨てると言うんですか？」

「当たってくるといういいよとは言っただ心算^{つもり}だけどね」

そう言って、登紀子は紅茶を丸呑みする。

けふ、と渋めのお茶を飲んだ時の渋い顔になると、登紀子は紅茶をカップに注いだ。

「だって人は言葉に出さなければ伝わらないじゃないか。それが確証と云う物だと私は思うよ」

彼は、言い返さなかった。

「君の思いだって今此処で私に相談していても静江ちゃんには伝わらないよ」

「登紀子さん、事実ですけれど言い過ぎでは？」

「怜子ちゃん、私が出来るのは背中を押すだけなんだよ」

それもそうだ——怜子は納得した。

確かに、カウンセラーというのは全てを補助する仕事では無い。言える事は自分が言う事のみだし、後押しする事しかできない。

「つまり私に言える事は、言わなきゃ伝わらないよ。静江ちゃんはテレパシーを使える訳じゃないしね」

深々とした静寂が流れる。

そう、ですね——気弱な男はそう言って、顔を隠す様に下を向く。

「さて、君に必要な言葉は《勇氣》の導。傷付く事を怖れた儘では得る事も出来ない」

登紀子の声が、穏やかに部屋に響く。

……また、魔法か——怜子は心の中で呟いた。

「傷付く事に恐怖を持った儘、君は何もしないで過ごすのかな？
それとも——そう、それとも、《勇氣》を用いて、君は行動するの
かな。もしそうなら、今、此処に居るべきでは無いよ」

登紀子の安寧を招く真っ黒な両眼が、男を捉える。

「行動を起こすんだ。君がすべきは伝える事だろう？」

ハッキリと、丁寧に、穏やかに、静かに。

その言葉は部屋中に響き、共鳴するかの様に、彼の心へと入り込む。

怜子はこれを知っていた。

何度か味わえば理解できる。

「——傷付く事を怖れないで。誰も傷付かずに世界が動く事なんて
無いのだから」

そう言って、登紀子はポケットから白いお守りを取り出す。

これは、以前少年に渡した物よりも一回り大きいお守りだった。
登紀子は男にそれを渡すと言った。

「《勇氣》の出るお守りだよ。必ず、人は勇氣を出して踏み込まな
ければならない時がある。怖れて、逃げていては駄目なんだよ」

——男が礼を言って、部屋を出た後に、怜子は質問した。

「怖れて逃げていても、物事は進むじゃないですか」

「うん。時の流れに全てを任せてもいいかもしれないね」

「じゃあ何故——」

怜子が続けようとした間際、登紀子が遮って言った。

「正直、私達がどう行動しようとかこの世界はそんな大きな波を受けないんだけれどね。私が言いたいのはそうじゃない。勇気が無くて誰かの保障が無ければ言い出す事も出来ない。これは私に怜子ちゃん、他の人もだけれど、それで人生に悔いを残したくないとは思わないかな？」

怜子は、言い返せなかった。

確かに、そんな事で後悔したくない。

「人は些細な事でこじれて、そのままに分かたれてしまう事もある。度合いに依るけれどお互いに謝れば、元通りになる時もある。私達は勇気を出してそれを行える人になるべきなんだ。言いたい事は言う勇氣、助ける勇氣、自分の世界を変える勇氣。そんな一歩を踏み出す勇氣が、私達には無ければならないんだ。——私は、そう思うよ」

「つまりやるだけやってみろと云う事ですな」

「何か違う気もするけどそんな感じだね」

そう言って、登紀子は頷く。

——暫くして、登紀子は右の掌に左の拳を落とす。

きょんとした様子で怜子が見ていると、登紀子は言った。

「そう言えば、松代君まつしろからお金貰ってないね」

「予約外だったんですか？」

「うん。仕方ないね」

登紀子は桜色の携帯電話を取り出した。

折りたたみ式が出る前の様なレトロな携帯電話だった。

怜子の視線に気付いたのか、登紀子は笑って言った。

「これ、母さんのお古なんだ」

「桜色の趣味ですか」

「ああ、これは私の趣味かな」

意外かな？ と登紀子は首を傾げる。

「そうですね……登紀子さんですから、白か黒かのイメージがありましたし」

「酷いね」

「すいません。正直に話すべきかなって」

怜子が謝ると、登紀子は苦笑いしながら言った。

「ありがとう。嬉しいよ」

「え？」

登紀子の言葉に、怜子は問い掛ける様な視線で登紀子を見る。

「私は、可愛い物が好きなんだよ。自分の趣味はあまり曝け出す気は無いんだけどね」

「兎とか——ですか？」

「うん。でもワニとかも可愛いと思うんだ」

「ワニですか……私は可愛いより怖いという気がしますけれど」

そうかなあ……登紀子は呟いた。

少し、子供らしいぼやき方だと怜子は思った。

「そうそう、電話しないとね」

そう言っ、登紀子は携帯電話のボタンを押す。
扱いに慣れていないのか、普段あまり使わないのかはわからないが、少し押し方がぎこちなかった。

「――もしもし、静江ちゃん？」

「あれ、登紀子さん……明日は槍が降りますね」

電話越しの声はそう言っ、ふう、とため息を吐いた。

「もしかして瑠璃君の相談料の件ですか？」

「という事は告白されたんだね」

「断りました」

あー……登紀子の笑顔が凍った。

目が泳いでいる。

怜子が暖かい目で外を見遣った。

「職場恋愛程面倒な物は無いですし、私だってカウンセラーですから。相手にそんな遠慮しがちな印象を与えてしまうのはどうかと思われます」

「静江ちゃんは結婚して『仕事と俺どっちが大事？』と聞かれた時『仕事に決まってるでしょう』って答えそうだね」

「当たり前です。仕事が無ければご飯は食べれませんし、生きていくのも無料ではないんですよ」

「その通りだけど――息抜きしてみたらどうかな」

「お断りします。現実には常に迫ってるんですよ」

そうだね、と登紀子は言う、それで、と続けた。

「お金の件なんだけれど」

「それならいつもの口座に振り込んでおきました。その分は瑠璃君の給料から天引きしてますから問題ありません」

「うん、いつもながら君のその行動力は凄いと思うよ」

「遠回しに言ってくれてありがとうございます。では」

ブツン、と通話が切れる。

数秒沈黙が流れた。

「……怜子ちゃん」

「……何でしょう」

「よく静江ちゃんと友達になれたね」

「まあ、静江ですから」

悪い事したかな……登紀子は呟いた。

今度は、大人の後悔の如き言い方だった。

「ああ、もうそろそろ時間だね」

登紀子の言葉に、怜子は時計を見遣った。

午後6時——確かに、もうそろそろ帰宅すべき時間だった。

「気をつけて帰るんだよ。もし何かあったら、私に電話するといい」

「電話できない状況だったらどうするんですか？」

「そうだね」

うーん、と登紀子は考える素振りを見せた。

「勇気を出して、『助けて!』……そう思えば、私に届くのかも」

「非合理的ですね」

「怜子ちゃんのヘルプならきっと届くよ」

そう言って、登紀子は笑った――。

#4 『母と子』

夕暮れは如何様にも綺麗に道を照らし、影を生み出す。

そんな帰り道の途中、怜子はコンビニに寄って、缶コーヒーを一つ買った。

微糖だったが、怜子にとってこれは『微妙に砂糖が入っててまさに微妙』なコーヒーだった。

しかし買ってしまった物は仕方ない——怜子は美味しくなさそうに、缶コーヒーを飲み干した。

怜子は缶コーヒーの缶を近くの自販機の傍にあったゴミ箱に投げ入れると、再び歩き出した。

「突然話しかけてすまないけど」

怜子の行く手を遮るかの様に、女が現れた。

黒く長い髪、大人の様で無邪気に透き通った瞳。

何処か怜子の知っている誰かに似ているその女は、一枚の薄っぺらな紙を怜子の前に突き出した。

「この住所は何処か知らないかな。道に迷っちゃったんだ」

「知ってますけど——」

その紙に書いてあった住所は、怜子はよく知っていた。

偶然にもそこは、自分の家の住所だったのだから——。

「ここに何の御用があるんですか？」

「知人に会うのさ。ついでに泊まる場所が無いから一晩泊まれたらいいな——とか考えてる」

「知人って、澤さんですか？」

「そうだよ。君は澤ちゃんの事を知っているんだね」

そう言って、女は笑った。

「流石にこの偶然は無いね」

女の言葉に、怜子は首を傾げる。

二人が歩みを止めると、女は言った。

「アリスの計算通り、かな」

ぞくり——怜子は背筋に冷たい鉄の様な物が走った気がした。それは、彼女の才とも言える感覚がものを言っていた。

——魔法使い——。

あたかも怜子の思考を知っていたかの様に、女は言う。

「その通り。危害は加えないから大丈夫だよ」

「その根拠は？」

怜子の言葉に、女は笑った。

そんな物が必要かい？ 女はそう、眼差しで問い掛ける。

怜子がそれに戸惑う中、女はこう言った。

「私は、魔法使いだ。きっと君が知っている通りに、そして君が知っている魔法使いと同じ、魔法使いなんだ」

「だから信用しろと？ それなら『私は人です。人ですから私を信用する事が出来ます』という人と同じ根拠になります」

「じゃあどういう根拠が必要になるのかな？ 私の名前？ 力？

それとも身体？」

「その三択は間違いなく違うと思います」

「そうかな。それじゃこうしよう。君の知りたい情報をあげるから、私を信用してくれ」

「その取引は凄く信用できないと思いますよ」

「ではお金」

「更に信用できません」

「うん。お金そんなに持ってないしね。いや、日本のお金はそこまですてきなないんだ。三千円くらいかな」

「もう少し安直な方法は無いんですか？」

怜子は少し苛立ちを感じながら女に問い掛ける。

そんなカッカとしないでくれ、と女は言う、少し間を置いてこう言った。

「澤ちゃんは、グモーの目覚まし時計を大事にしてくれているかな？」

この言葉に、怜子は女と、怜子の尊敬する人物の姿が被って見えた。

『そういえば、母さんがこの街にいるんだ』……登紀子の言った言葉が、怜子の脳裏に蘇る。

「そんな——そんな偶然がある筈が……っ」

「そう。こんな偶然はある筈が無い」

女はそう言って、微笑んだ。

「だから私はアリスの計算通りと言ったんだよ」

アリス——また、怜子はその名前を聞いた。
今日一日で、二人から聞いたその名前——。

「澤ちゃんの家を探していると答えが来るとは言ってなかったけれど、きつと意地の悪いアリスの事だ。それを教えずにめげないという事をきつと知っていたんだらうね」

「底意地が悪いんですね」

「無駄な変化は起こさせない主義だから仕方ないさ」

そう言って、女はため息を吐く。

怜子が、『アリス』という人物が一応は歴史という物を重んじて考えているのかと認識したと同時に、女は言った。

「いちいち見るのは面倒らしい」

「テレビの番組表を何度も見直すくらいなら消すような人ですね」

「そもそもテレビを点けようもしないね」

女はそう言って苦笑いすると、歩き始めた。

「澤ちゃんは元気かな」

「はい。まだまだ現役の様子です」

他愛も無い会話は続く。

「登紀子は何か悩んでたりするのかな」

「さあ、どうでしょう。悩んでる人の相談に乗れる人や人を観察したり見抜いたりする能力を持つ人は案外自分の事がわかってなかったりしますから、悩みがあっても気付いてないかも知れません」

怜子の言葉に、女はうーん、と唸って言った。

「登紀子の場合は、悩んでも勝手に答えを決めるからね。やっぱり愛情に飢えて歪んじゃったのかも知れない」

女の言葉に、怜子は質問する。

「愛情に飢えて？」

「そう。愛情に飢えて。両親共働き、たまに家に帰ってきたら色々家が勝手に改装されていたり、料理が上手くなっていたりで自立心は旺盛だったんだけど、如何せん早すぎた。恐らく原因は私達と——孤独かな」

やや悲しそうに聞こえたその言葉、『孤独』。

怜子は、登紀子の事をよく知らない。

それでも今、何故か——登紀子が近くに居る気がしてならなかった。

「登紀子には友達も居る。アリスだって登紀子の友達だ。それでも——登紀子の心には、隔たりが在った」

「隔たり、ですか」

「そう、隔たり」

怜子は足を止める。

釣られて女も足を止めた。

「此処ですね」

「此処なんだ」

怜子が頷くと、女は扉の横についている名前が書かれた表札の下にあるインターホンを鳴らす。

「たーのもー!」

「間違はなくそれは違う頼み方ですよ」

「御用じゃ御用じゃーっ!」

怜子の言葉と、ほぼ同時だった。

扉がばん、と勢い良く開き、フライパンを両手に構え、まるで太刀を上段に構えているかの様な威厳すらも見える澤が現れたのは。

「何奴じゃ!」

「澤さん、落ち着いてください」

怜子は少し、恥ずかしくなった。

「何奴と言われると、旧友じゃ」

「あら、あらあらあら――由美ちゃん?」

澤はきよんとする。

女――由美は、笑って言った。

「久しぶり。澤ちゃん」

澤は、穏やかに笑って言った。

「久しぶり。由美ちゃん」

澤は由美を抱き締めると、すぐに離して奥へと案内する。
その様子を見て、怜子は暖かい気持ちになった。

「来るって連絡してくれたら準備したのよ?」

そう言って、澤は冷蔵庫から牛乳パックを取り出した。

澤、怜子、由美の三人分をそれぞれカップに注ぐと、澤はそれを手早く配当する。

「急だったものだから、連絡し忘れてたんだ。ごめん」

由美は澤から目を逸らし、左頬を人差し指で搔く。

「そうだったの……」

澤は少し寂しそうな表情をするや否や、すぐに表情を変えて、意地悪く笑った。

「というのは嘘ね？」

「何だ、ばれちゃったか」

「だって、昔から同じ言い草ばかりだもの」

「うん。そうだったかな？」

「そうよ。どうせ由美ちゃんの事だもの。『準備をさせたりとかの迷惑とかかけちゃうのは嫌だなー。かといって日本に来たなら一応会いに行かなきゃいけないし……出来るだけ連絡せずに準備とか気遣いをかけない様にするかな』とか考えたんでしょ？」

「凶星。流石澤ちゃんだ」

そう言って、由美は無邪気に笑った。

「当たり前じゃない。長年の友でしょう？」

澤は、暖かい笑みで由美に笑顔を返す。

「それで」

何があったの？ と澤は怜子に問い掛ける。
え？ と怜子は問い返す。

澤は首を傾げて、更に詳しく問い返した。

「どうして怜子ちゃんと一緒に？」

ああ、それですか。と怜子は右の掌に左の拳をぽん、と落とした。

「実はアルバイトの帰りにここの住所を聞かれて、つい案内してしまっただけです」

「そう。凄い運命的だね」

怜子はふと思った。

そもそも運命的どころか、アリスに教えて貰った事では無かったか？ と。

由美は怜子の思考を読み取ったかの様に、『秘密だぞ』と澤に聞こえない様に呟いた。

「それで——お泊り？」

澤の質問に、由美は頷いて、言った。

「お願い、できるかな」

「私の部屋を使うか、怜子ちゃんの部屋を使わせるかの二択ね。私の部屋を使う場合——私は徹夜になるけれど」

「トイレでいいよ」

「由美さん、床にお布団敷いて、私はそっちで寝ますからお願いです。それからそんなシッダルタの某息子さんの様な事はしないでください」

怜子の一つ、ため息を吐く。

由美は感心したかの様に、言った。

「怜子ちゃんは仏教について知ってるんだね」

「登紀子さんが何だかんだで色々語ってくれましたから」

「ああ、登紀子の影響か……」

成る程ね、と由美は呟く。

怜子はそんな由美を外に、澤に言った。

「澤さん、夕飯は私が料理します」

怜子の言葉に、澤は首を頑なに横に振る。

「久しぶりに旧友と会えたんですから……今日くらい——」

怜子の説得の言葉に、澤は机に手を突いて立ち上がる。

「駄目っ！ それとこれとは話が別よ怜子ちゃんっ！」

「え？」

澤の言葉に怜子はきよんとする。

そんな怜子を外に、澤は腕を組んで威勢良く言い切った。

「料理は私の楽しみっ！ それを奪おうと言うのなら、受けて立つわっ！」

「怜子ちゃん、駄目だっ！ 澤ちゃんは今こうなると譲らないよ——」

「そうですか。じゃあ夕飯をお願いします」

「まっかせなさいっ！ 腕によりをかけていい料理を作ってあげる」

から！」

怜子が柔らかな笑みを浮かべると、澤は頷く。

由美は、何か暖かな気分になった。

——不意に、幼い登紀子の面影が、由美の脳裏を過ぎる。

少し、由美は悲しくなった。

自分は、登紀子と血が繋がっているのに——怜子ちゃんと澤ちゃんのように決して家族の様にはなっていない。

互いに別々の檻の中で暮らしている様な物だ。

由美はこういう暖かい家族を見ると、少し、羨ましくなる。

この気持ちは、登紀子には届かぬ母の想いだろう。

そんな悲しみを噛み締めて、由美は言った。

「澤ちゃん。夕飯はオムライスがいいかな」

「え？ あ、うん。良いけれど——どうしたの？ そんなに泣きそうな顔して。何か痛い事でもあったの？」

由美は、無理矢理笑って見せた。

「痛いんじゃないんだ。少し、懐かしくてね。ほら、昔二人で冬の夜空を見上げながら冷めたオムライスを食べた事」

「あの時は由美ちゃんがいきなり外に飛び出たんじゃない」

「だって、あんな狭くて苦しい所で食事をとるだなんて嫌だったんだもの」

その言葉に澤はそうねと笑って返す。

——その言葉に、偽りは無かった。

然して、澤に話した全てに偽りは無かったとは、由美は今、神に誓う事は出来なかった——。

「そうそう、登紀子さんが言ってたんです。『母さんがこの街にいるんだ』って」

由美が苦々しい感情を噛み締めていると、その様子を察したのか、怜子は、まるで気付いていない風に、澤に雑談を持ち掛ける。

「あら、あらあらあら！ それはいい事ね」

「私もそう思います」

「そう——なのかな」

澤と怜子の言葉に、由美は食い掛かる。

二人の注目を浴びながら、由美は言った。

「それでも会いに行かない母親って事もあるし——」

「お互いに都合って物があるんでしょう。きっと」

そう言って、怜子は牛乳を飲み干した。

「よしっ！ 今日のお料理も完璧ねっ！」

皿に盛られた綺麗なオムライスを、澤は意気揚々と机に置いた。

「早かった——って、これは……半熟オムライス？」

「ですね」

怜子は頷いて、スプーンを手にとって口へと運ぶ。

由美は興味深げに、ついでに怜子に配膳されたスプーンを手に取り、

「美味しいです」

怜子はそう言って、オムライスを次々と口へ運び始める。
それを見た由美は、とりあえずオムライスを食べる。

「――美味しい」

澤は笑った。

――怜子と由美が部屋に入った時の事だった。

「由美さんって、嘘が下手ですね」

怜子はそう言って椅子に腰掛ける。

由美もぼふっ、といい音を鳴らしてベッドに腰掛けると、そうかな？ と返す。

そうですよ、と怜子は頷いた。

「少なくとも」

怜子是由美の方に姿勢を正して、真っ直ぐ見遣り、続けた。

「登紀子さんの事に対しては、下手です」

「そう、だろうね」

由美は怜子から目を逸らして、続け様にこう言った。

「登紀子は、私を家族として認識してるけれど……我儘を一つも言
った事が無いんだ」

「それは登紀子さん自身の心にゆとりがあるからでは無いでしょう
か」

どういう事かな、と由美は怜子に問う。
ふう、と一息吐いて、怜子は口を開いた。

「余裕があるんです。切羽詰まっていないうか——そうですね、相手の事を考慮している人ですから」

「つまり、相手の事を思いやる余裕がある、という事かな」
「そういう事です」

「他人行儀な気が如何せんするんだけどね」
「甘えてほしいんですね」

うん——由美はぼそりと呟いた。

「由美ちゃん、お風呂入ったわよー」

澤の声が聞こえてくる。

由美は立ち上がると、言った。

「それじゃ、ちょっとお風呂入ってくるよ」
「いってらっしゃい」

——由美が部屋を出た後、怜子は日記を開き、綴る。

『今日、登紀子さんの母親と出会った。登紀子さんの事を凄く大切に思っている人みたいで、すぐに気遣う登紀子さんが心配な様子です。きっと自分自身に原因があると思い込んでる事が原因でしょう。早く登紀子さんと和解してくれるといいな』……そんな事を綴ると、押入れから敷布団を取り出して、敷いた。

怜子は思った。

何故、登紀子さんは母親に甘えないのか。

この疑問符に答えは出ない。

悶々としたこの疑問符に、怜子は答えを出せなかった。

——一方、登紀子はいつもの部屋で紅茶を注いでいた。

「ダージリンでいいかな？」

そんな事を言いつつ、紅茶が注がれたカップを小さな客人の前に置く。

金色の髪、青い瞳、白いエプロンのついた青いワンピース。

そう、まるで『不思議の国のアリス』の童話の中に出てくる主人公『アリス』の様な姿をした客人は、くすくすと笑った。

「最初から用意していたというのに、その問いは無用の気遣いじゃないかな？」

「一応、お客様だからね」

「私は視察に来たんだけれどね。そうそう、由美には会えた？」

「まだ——会ってないかな」

「全く、由美といい登紀子といい、二人ともへたれなんだから」

「一度歪むと、直るのは難しいんだ」

「戻そうとしなければより一層難しいね。すごく難しい」

けれど——アリスは登紀子の目を真っ直ぐと見据え、言った。

「戻す事が出来なくても、代わりの部分を造り出す事は出来る。言葉は、謝る事が出来るし、和解し合う事も出来る。それをしないのは、何故だい？」

「しない、じゃないんだ」

アリスの言葉に対し、登紀子は寂しそうに言う。

そしてカップになみなみと注がれた紅茶を丸呑みすると、続けて言った。

「出来ないんだ」

「何故？」

「私が止めたら、きっと母さんは止まるだろうけれど、私はそれを望まない」

登紀子は、嬉々とした様子で笑った。

「母さんは、私の憧れなんだ」

そう言って、登紀子は自らのカップに紅茶を注いだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0165w/>

本当の魔法使いの意味

2011年11月4日06時17分発行